四天王剿盗異録 前編 五

へ 13
974
5

源家勲績四天王剿盗異録巻之五

東都　飯台　曲亭主人　著
門人　乢蕃癡叟　校

弥介単身にして洛に赴く談
附 関太郎兄弟衛師行光が事

第九綴

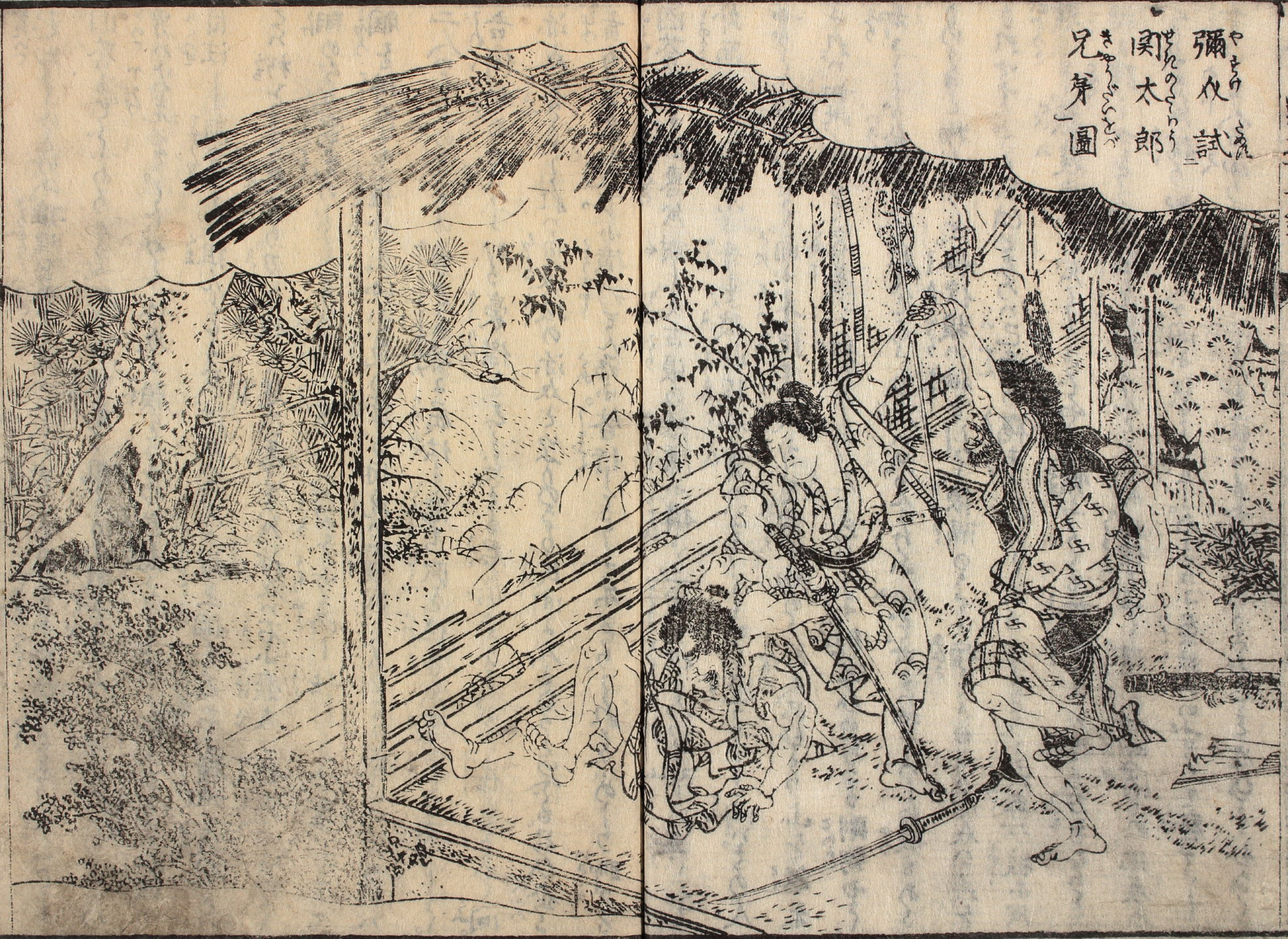
弥介ハ那須沢にて深雪を欺き殺し。偸来たる金を懐にして。ひそかに西をさして走りけるが。その日の薄暮に大井の里大井川をも打わたり。なほ追人のかゝらんことを害怕て足より街道をさけて。坤の山をうち越て尾張路より都にまゐらんと志て。山路をくまなく分入に木立まばらに生茂りて。折しも霄闇のころなりければ一歩の前もみえわかず。杖をもて草葉の露を拂ひつゝ登りゆけば。ある平坦なるところに火の光熗々と閃きたれば。是なん獵夫の照射して鹿を逐ふなるめと

見やりつ。かくてその処に走り着バ果して一個の樵夫。木の枝を多く積おきたり。
これに火をつけて成り居るが。爾汝が夜をこめて。ぞれ山を越え来るを
見て。怪めるさまなりしなり。この山中ハ猛き獣の栖をりて。夜に入りてハ
さすが越来る人もなけれバ。旅人ハかならず朝まだき行かふ事ハあらねども。そのまゝ夜すがら越な
かんるいと危し。火氣ハ獣の怖るゝものなれバ。これを携ふべしとの心にて火縄の
うら火にさし出したれバ。爾汝ハその厚志に謝し。これを携へその処を
走りさりぬ。彼樵夫今故なく爾汝に火縄を与へしとそのこゝろ量知りて。
持ふ渠奴が面魂ならぬものを見とがめれバ。怪しく思ひて懐中なる金をあつからんとなりて。
その火縄の火を的に射ころさん謀りとさとりて。火を打消んとしたりしが。
いかく。渠奴縦ひ害心あるとも。何程の事かあらんなきさんずその動止を窺ひて。
目を醒させんと思ひのをさとりたり。火縄を杖の先に結つけて。横に遠く
さし出し路五七町も来ぬらんと思ふ時。忽ち後より飄くゆえて。杖の真中を
丁と射られバ。杖ハ割くて手にひゞき。火縄ハ遥に飛ちりぬ。爾汝ハ手かなに
違ざりしとあざ笑ひ。身を縛して地上に倒れ。死したる容して居たりしが。
樵夫ハ已に射とめぬと思ひされバ。徐に出来りて。まづ弓をなげてその辺り
なる所を探り。爾汝が死したるを探り当て。荒介とうち笑て。その懐に手をさし
入ていて。財布を引出さんとするところを。爾汝ハ卒にむくと起て。腕をむずと捕。一打捻て
投退れバ。樵夫ハ爾汝が与ふ躍て其逆さまに仆れしが。彼もおぼえある癖者なれや。
起あがりて走りかゝるを。爾汝ハ手早く足を揚て。その膊をさして突ハ。噫と叫びて。
仰ざまに撲と伏たりしが。爾汝ハこれをつかんともせで。身を起して塵うち払ひ。
これより路をいそぎて又十町あまり走りたる時。殊に険しき崖道に。一個の
白屋ありて。年紀卅可なる壮佼色黒く骨太く力士の一荒ありさうなるが。

只今外より帰りぬとみえて赤裸にて蚊を焼くゆゑ居られば其の家に
立よりて其の夜の宿りを求めたり。彼壮佼弥次郎甚だ憂なくこゝに来めるをうれしみて
潜に怪しく見くれば北より来る旅人をみな見つけて南より来るかへる者
これを殺して一人も漏らさずしてありしに此の者ハいたりてまでハ来らざりつる。
されど吾術が網を脱る者をあさめに役をつくる其の命を奪ひ来めるに火虫の燈
ほとりあるむらし。僥倖もふと意中にうかびたる也を見くらべてこれを見あらはし給ふ。
頭を回して家の四隅を見るに猟夫の住ひと見えて。壁すみの一張の弓を掛たる柱
には君多く獣の皮を懸たり。時に壮佼が呉くく。かくとめまゐらせ申すも。氏んのなふ
ごく家貧しければ饗応もべきやうもなし。殊さら今宵ハ蚤蚊のはげしくて夜もすがら
よく寝られず。蝿を追ひやらんとすれども。只露次なのかれ。おはしく勝るのミ
なり。夏の夜の明やすければとく彼処に入りて睡り給へかし。弥次もよろしき程に

回答して。其の恵みを謝し。又古張の屏隔に構る一室の裡に入りて引しめ臥しまして
外面より人の来る音を窺ひしに。彼壮佼今宵ハいかにもして遅うなりしと。向へば其の人
ゆるく裡に入りて。向ふ年紀十七八にして懐に物ある旅人只今更に山を越来
られば如此くまで容易く射てとりつらんとおもふに。彼其の外なる剛弼にて
却てわが命をとられんとおもひ。人ハ只見かけに似ぬ世まんしんあるし奴もある
ものなりと物がたるを。壮佼頻に袖をひきて屏隔のうちに指をさしながら。弥次これを
きれ出して。さてハ此ところハ已前の猟夫が家かとおもひたりしに。これ再び彼に代
験して。旅寝のうさぞかしさぞやと。瞻ふとくも枕上にありたる探り刀をとりて
腰に蹲らせ。中なる屏隔を引あけんとする時。壮佼も中く燈火を吹消しぬ。弥次ハ
くらがりに探り足して二人が間にむざと坐し。あまりに蚤蚊のはげしくて寝がたし
幸ひ主人も帰りたまひぬと覚えたり。夜もすがらに語りあかさんやとおもひて。

彌次試二関太郎兄弟一圖



起出てゆふの推理を常とする二人の男もその一言に勢ひを呑まれんとせし
回答もせずありけるが。折しも吹来る風につれ蚊遣火を燃よれバ乃
男ハ火光にて。ちらめく弥九が顔をつくづくと驗然として大におどろかれしと壮佼に
目注し。両方より組んとする所。弥九ハ二人が襟上掴ミ左右に撲地と投つけ跳
て朽ちしと起あがり刀を抜て迸ひ来るを。弥九ハ右に靡き左に柱。飛鳥のごとく
翔めぐり。電光のごとく身を閃し。遂に二人が刀を打落し。怯むところをつけいりて。
腰を捕ひて薙仆し。汝ハ鼠の輩なり虎の鬚を引んとするやと罵りけれバ。
二人ハはじめてその勇力に辣て屈伏し忽ち頭を低れ束手を叩しく。
吾儕眼ありながらかゝる豪傑をしらずとも君ハいかなる人なるぞと問。
弥九答て。これハ浪花の弥九といふものなり民間の人とあることなるも思ひ企る
旨ありて天下に横行せんが為に。啓行してここに来まりつれどはじめより聊かる

ところあれバ汝を殺さず汝らもまたその獨夫なれど。名告れかしといへバ二人
又ゐしく。吾儕ハ関の太郎関の次郎といふ兄弟にて獣を猟世を渡るといへ
ども勇く力人に勝たれバ遂に山賊となりて。多く旅人を斬害しその
路費を奪ひ取りしに對應のみなれバ。今日も及ぶ人あらじと思ひされバ
今宵はからずも君が一棒を得てはじめて。井蛙の浅ましきを知り俯頭くべ
きの慈悲心を垂まへて。兄弟が一命を助玉へといふ。弥九呵くと打笑ひ。ますま
幼より志を立運あらバ天下をも奪ふべく。運到らずバ世界の貨をも物と
せんと思ひ定めたれバ。汝らも又吾党の人なり。惜むべき勇あれども智なく僅の路費
を目がけて山林に朽果んよりも。天下の金を奪ふの一銭を掠めるものも偷ところ
ハいつも汝ら今より我に従ひ。富貴を王侯とひとしくして人間の歓楽を究ん
こそ又よろしからずやといへバ。二人の光棍大によろこび。遂に席を煮酒を酌て文賞

さらんと誓ひたり。弥次関の太郎に對ひ。これハ是より都に上りて。皇城の人氣の量るべくもあらん。兄弟ハわが此の地にありて来春のころまで待てよかし。その約を違ることあるまじといひつゝ金十両を與へられバ。人々手をうちてよろこびき。恭しくその命を稟かくて諸朝弥次まで太郎とともに兄弟別を惜みて一里あまり送りゆき共に再會を約して決別しけり。弥次ハいそがぬ旅なれバ且く尾張國に足を留め阿波手の森。夜寒の里。鳴海。呼継濱など經歴し一日熱田の社頭をよぎりけるに人居多く集ひければ何事やらんと立よりて見るに人をとりかこみつゝあやしげなるわきに一個の修験者頭に圭の冠を着て橡染の禪衣を被て高座を踏ほどこし厨子の裡に醫王佛の小像を安置しその傍に感得醫王善逝解魔法印行元施薬といふ十四字を縹緲に白く染出したる幟を立て前に四貼の薬を捧て高やかに呼りけるは。抑この醫王佛ハわが高祖役小角。往昔枝ぬ葛城山に在せし時夢想感得の靈像なり。病難に係るもの。信心祈請しく薬を求めくれハ。大患ハ七日。小患ハ三日ならずして功あること。譬へバ枯たる稿の雨に舒び凋る花の日を得て開くが如し。夫病に四百四病ありといへども。風疼の二症を離れず。薬に八百八味ありといへども。君佐の一方に過ぎず。今この靈薬僅に四剤にして。万病を治すること更に過ることなし。これハ天の四象に配するときハ日月星辰。地の四象に配するときハ水火土石。年に干ハ春夏秋冬なり。極に執てハ東西南北なり。その得ところをもとへ四難にひとしく。その功験ハ四恩にまさりて。よく苦集滅道の四諦を求火風の四大を保しむ。念じ疑ふことなく。しかし靈薬を求めよと呼ければ群集の中より。眼を患ふもの。歯の疼むもの。あるひハ脚氣。疝。痔。或ハ痰。癪。瘧。のがさるゝ病症を告て薬を求るものあり。行元件これをうけて。方剤ハ医王の佛意に任せ奉るべしとそれも志をくべし。今この四貼の薬を仏前に進て。その中にて

行元熱田賣藥圖
感得醫王善逝
行元施藥

的中もなくバ茶を試るべし。尊像の御手にさゝげまつりし是その病を治すべき薬剤也。しかれども信心踈なれバ奇特なし。よく祈念してのちに用ゆべし。四貼の茶を紙嚢に載恭しく礼拝してこれを仏前に置バ一貼の茶おのづから折敷とびさるべし。仏像の御手に着ぬこれをもとめし者の鳴呼奇なるかなと嘆賞しあへて鳴も止ざりしが。行元はその人毎にいかれてもうしく茶を授ける。銭を得ること夥し。亦奴これをうらやみ潜にあやしみ疑ひて其賣僧何の術かあるらし。かく人を迷して銭を貪るにや。されバ彼を謀てこれを探り聞んと思ひけれバ。遂にその処をさりて且くして来りたるに群集も已に途絶されバ。亦奴そくとく立いりて只管その霊験を称賛し。それがしハきのふその神茶を請えたる旅人なるが。久しく患たる脚気只一夜のうちに愈されバ。そのよろこびを述ん為にきつるその次に逗留せり。誘ひて彼処の酒楼に登りて。酒をも与ふべしとくと急しきれバ。

行元も実とおもひするゝ打つれだちてかなたの家にゆきて遠く酒を五升ほど亦奴ハ一個に酒肆に誘ひ行。盃の数もかさなりて。その家を立去しが。是のみてハいまだ興足らずとて。又別の酒楼に誘ひ登り共に酔を尽して立出るに。このたび酒の價を償ふべきなれバ。行元これを怪み。汝元旅人の身なれバ。この地の商人に知己もあるまじきに。何の故ありて酒の價を償ひなさるゝやらん。聞えしといへバ。亦奴声を低して。我身怪き事をよく知り。しかしに術ありて。何にても價を償ふといへども。彼もこれを忘れて償ることなし。しかるに行元もこれを美みて只願くハその術を伝へ給へと請需む。亦奴又いへらく。然ば術をさづくべけれども伝がたしといへども。和尚が霊験を示して茶を賣の方便なきやうせんかなさぬ術と交易もなすべしといふに行元これを聞て大によろこび。然れば別に術あるにあらねば。仏像の手ハ磁石なり。茶種の中に鉄の粉あり。よりて鉄ある茶ハ必ず

仏像のまゝに着鉄なれバさらず。弥次が此くへく。これを又別に術あらんとて
像さへ消齋に残を授ける。後に人よりに來りて酒を飲む時するしく價の
さりとなバのみとなられと諭しおくのミ。いまでも價を得ずして。物を賣買なる
んやとの為に行えならび呆れそそて是は身に謀られしまる生活の一術を
ならはしめらと思ひとひ。遂に東西にまぎれ去りぬ。弥次が行えの斯計を見て
得たく。つらく思ふやう世間の賣僧愚民を迷はして金銭を貪り。さらつとしかるに
彌のごし。さりれども彼その器狭くして。日に数十貼の薬を賣りて口を足るる
ところをりしまれをしてこの計を紛しめバ一時に千金をも得べきのみなと嗟嘆
しぬ。呉容が宋をとるらく。亀茲の方を買得る風情にて。次乃日この地を
起程して。直に都に登りたるが。果して数年のうち。彼行えが計に倣ひ。慈心寺乃
観世音をとやせてその香銭を偸らんと謀りしも。その初一念とぞ知られける。

第十綴

和泉式部稲荷山に詣る談
附 保昌聰察弥次を朧九と知る事

かくて弥次ハ日ならずして都によりて著五條なる所に旅宿して洛中洛外を歴覧
なすに元是吉備の深山に人となりしかバ。ひとしく王城の地に登りしかれバ。山水の絶景
なる人物の風流なる。詩歌管絃の妙なる。遊君妓女の艶なる目に見るところ
耳に聞ところ。美ならずといふ事なく。其善を尽しぬれバ実に昇平の楽國慾界の仙都なりと
嘆美しつ。魂飛して天外に到り。日ごとにうかれあそびて其内にも稼ける数十金も忽ち
用ひ尽しぬれバ。夜なく引剥して人の財宝を劫掠し。これを淫酒の為に用ひ
をてぬ。かくする程に月日のたつも覚えず。夏も過秋もくれて冬の初となりけり。
一日弥次ハ稲荷山に登りて。大きやかなる楓の下にやすらひ嘯き居たる折しも。摂津の
前司藤原保昌の内室和泉式部。稲荷に詣んとて。田中明神の辺りをすぐ

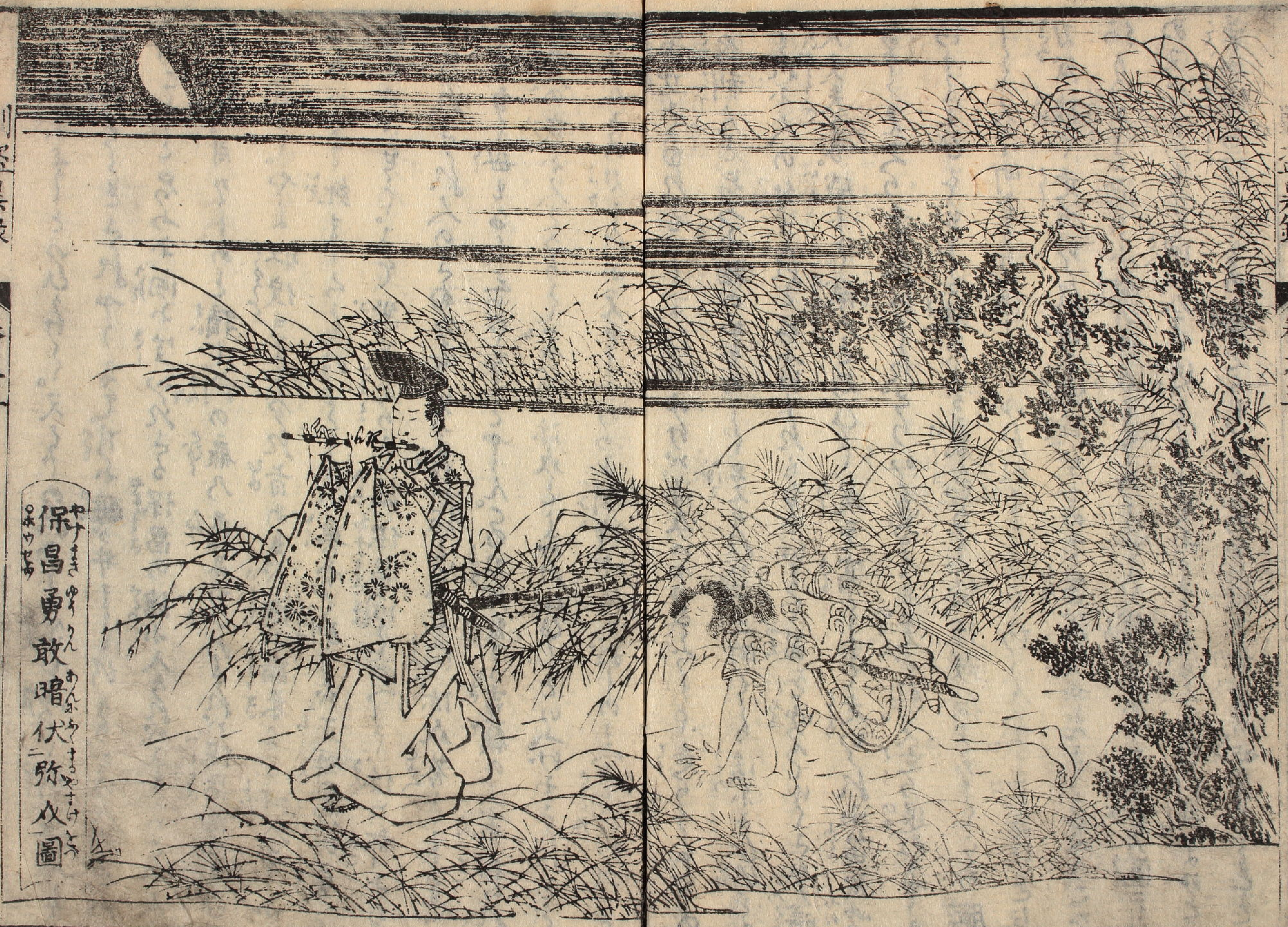
和泉式部遊雨於稲荷山圖

来ぬる時雲間をもる一時雨のちら〳〵と降りけるに。式部は雨具をもたせ来
されば。いふせまし。ともてしらひてあるに。泉式はおのがきたる襖を脱
て。これをめさるべうりやとわひつぐさし出しぬ。式部は山がつの童が。それを
きつく襖をかしめさまとおもひきれがこれをかりて着て参詣し。下向の程に
雨も晴よられば。襖をが泉式にかへしとらせて。やがて館に入りぬ。泉式も
せむとおもひしそのきは外ながめつゞくとおふやう。これとの頃洛中の妓女に
らんずまじて。天下の美人との外あわ〳〵としひつるに。今の上藕にくらぶれば
これ西施が門の狗なり。金屋の内に粧を閉。雞障の下に媚を深うするも上藕
にてこそ言も猶さらなく。紅梅の色異なるもそれまでの匂ひなれ。秋の
波は芙蓉の眸にあらはれ。丹花の唇をひらきては鶯のなる音聴るようも
なり優しげなる風情。画にかくとも筆にへ及びがたう。べし世にあらんとおもひ

出ては。錦繍の裀に坐して。今此上藕に腰を捧させんこそ。いかに楽しかるべ
けれと淫欲でまいやましてそのほとりなる家に倚て。今稲荷に詣けるの
める上藕は人の妻なるか。おもへもやらど外ざまから尋まいらする人ありて答て
いへらく。彼上藕は越前守大江雅致といへる人の女児なり。一説に権中納言
給ひしそてまつり。式部とよんめされける女房なりとおいせしが。和泉守橘
道貞の妻となりてのちしより。世の人和泉式部と称しかり。只容色嬋娟の
勝れたるのみならで。小野小町が昇りし道を学び。優婆塞の宮のことさ
らあひし迹を追ひ。月の前に琵琶を弾じて。傾く影を招き。花のもと
歌を詠じてはうつらふ色を悲めり。夫婦の契も又浅からで。小式部と
なんいへる女児ひとり儲けしかり。かゝ程もなく道貞みまかりけるのち
なれば。従四位下式部を将て。摂津前司保昌めしに再の縁を結ひ

ぬまでぞありけらじめの夫の周がかく。今も和泉式部とかやいふかんへ辞よ
りのがるるをゆるく。汝ハいのがれてちまじくひ。さるくその保昌乃
ぬし乃館ハいづくの様かやと尋ぬまば。それハ醒が井のあたりに大きなる
かる衛門ある家それと教ゆるを。ききつけて。その家が走り出で臥かしら
醒が井が本さしていそぎけるが。日のあるうちハしのぶに便よろしからず
途にて日をくらしゐけるに今宵式部が閨内に錬入りてうかがふ程に
をもらせたくと思へども。かれ形容にてハたちまち人に怪しまれ易し。
あるとき烏帽子狩衣したる人の来たりし。それ剥ぎとりて装束
つくろひ。恋乃関守を欺くべきものをと。さるかうさぬ程にて西洞院
高辻なれ。椽の木陰に望見るなりしも。摂津前司藤原保昌ハ朽葉
色の狩衣よ。鍬の金作の太刀を帯び。おぼろなる月を賞して立とり

笛吹て出れも中ゆ行きゆけば。汝がハやがて走りよりその
衣剥んと思ふに物のおそろしく覚えければ二三町ばかり後にそひけるも
それに人の付るれと思ふけれもなく。いよいよ笛を吹てゆくさま天晴
大丈夫なり。試んと思ひて足を高くして走かかれに笛を吹
あがりえりあれけれ。とりかかるべくも覚えざれバ又立ち退ぬがまま
ちまてびもしども。騒ぎたる気色なくれバ。汝何とかくこころ臆
しく。又十町ばかり倶してゆきぬ。さりとてかくてもあるべけきぞ。
刀を抜て走りかかれ時に保昌もしめて笛を吹やみて立かへり是ハ
何ものぞと問よふ。敵の汝もこころうせて我にもあらで刀を置し
ぬ。又何ものぞと問ば。今ハ逃とものがさじと覚えければ剥よゆと
答ふ。保昌つくづくその顔をうちみて。おのれ希有の奴なり。つきくと



保昌勇敢暗伏二弥次一圖

そのに来よかしといひけり。又ちぢめれども笛を吹きけり。汝今を
鬼神をしきられやうありて。共に醍が井まで行り。この人の家ハ
いづこぞと尋ねに向に答かれる保昌の館に入りれば。さらハこの人
摂津前司なりしめと猜しく。門の扉乃蔭みつけめられば。保昌尚もよび
入れけり。やよ壮佼きく知れ吾あもじ裡に詣来よとて入るとに。
汝ハいまだ鈍まじくめしらりに奥なるく到りぬ。正廳の次の房に
燈しりさせく。さて坐を定めて後。保昌向くいへらく。汝ハ都におい
ええられざれ人のさまなり。父が名ハ何といふと問。汝答くまづ身、
父もなく母もなし。二ツのとしとやらん。この刀を身く。吉嶺の山家に捨られ
賈人の家に人となりく。名をバ汝とよばれけりといふげにされこと
あらん。その刀まれにみせよといふ。国辞がさくてぬしのまへに閣めれと

保昌とりも打ち下し見く。又汝が顔をなくめうち瞻り。汝へてか
義弟朧丸なり。汝をとれをしらざりなんが。汝が母節折といひしもの。
懐胎して二月の時。わが父致忠の妾となりし。汝を生みしは世に異瘢
あるをもつて。雲月を吐に似たりとし。父これを朧丸と名づけたまひぬ。
あられに養ひがたれ故あり。汝が二ツのとし此春。節折とのに上野
国よつかへしたまひめれ時。よしも十歳なりしかりれバ。稚顔ハ今よ忘れきぞ。
その故ハかやうく。如此ると節折が素生。致忠の仁恵を備細にかたら
ませさくいふやう。わが父臨終に一言を遺したまひめりしハ節折が
若節保なくハ忌ひめまど。敵の残党なれハ力なく一旦汝へ汝ひしを
近曾中宮御産の祈禱につれて。大赦行をしふ席をとりく。朧丸母のか
なを奏せし。已に勅免を得られバ速にめし登せんと思ひくとも。

へと申しめたまへど。節折母子はさらに従ひゆかしめまゐらせ正通がもとへこそ赴れぞ。彼等いかになりゆきけん。いと覚つかなし。長男斉光は不幸かして十八才なるくだまかりければ。正才外に見えずもなく。これ世に去れのちは。いよいよふかくなげかれたまひし。朧丸おさなかりし刀をなん紀念まとらせおきたれば、さらに壮佼なるも忘れずして刀とらひ肤の黒癜といひ互にいふとあるは他ゆえぐんぞして朧丸なれし給ふ事なり。あはれ、さらに骨とも見まじと宣ひ死ぬ。父没しあひてより。既に七年に及ぶといへども遺命は一日も忘るることなし。只恨らくは節折に環会して其の檜られきれ縁由なる知ずといへども。かれ證迹あればまた散難に名乗にあらず。你今宵もれ見對して害心ありしとも。是你が罪にはあらず。おはじ都におりながら。その赤貧を救ざりしはまた過ならん。今より狼戻の

心を持し。你が母の節操と。また父の恩澤なるを顧み。身をもて立よと説示したれば。汝我は。ただひとへに身の素生をしりて大に驚きつ恭く坐を立らて保昌を拜しけり。保昌もとより孝心ふかき人なれば。父の遺命を守りて。汝我を憐みて骨肉の如くに思ひをそのちにまた名の一字を授く。左京亮（宇治拾遺二八　兵衛尉保輔とあり）保輔とぞ名づけられ。汝我はゆくゆく名家の弟ともやまはれ且くれ学の窓に書を読といへども。身を脩めれ光みもなく。浪蕩を扶かしくは管衣服に花奢風流をつくし。生平に着たるとおもひ乃誇りてしく長く裾を引しかば。世の人誇毳の保輔とぞ称しられ。

四天王剿盗異録巻之五　畢

乙丑冬新編

今雖未得全終辱承諸君子之徴先梓十回以發兌餘回必當不久而續呈焉

○後篇五冊當丑の年内うりだし申候

本所竪川松坂町
平林庄五郎梓